

7月14日 使徒言行録27章33～44節

「今日は祈りの日」

今日は祈りの日、と説教題をつけさせていただきました。いったい何の祈りの日なのでしょうか。本日は、日本基督教団が部落差別問題特別委員会を設置し、教団として部落解放の働きを開始したことから始まっている「部落解放祈りの日」だそうです。差別や抑圧の中にある方々を覚え、祈り合い、具体的に行動を行おうと呼びかけている日です。

私たちの身の回りには「人種、民族、性別、信条（信仰を含む）、社会的身分、居住地、身体的特徴、病歴、教育、財産等による差別」があると言われていています。そして私たちは、特に聖餐式において、「キリスト者か否か」という差を私たちと誰かの間に見てしまうのです。

「聖餐式には誰でも参加できます」という態度は、聖餐式を特別な物、神聖なものと考えないことにつながる可能性があります。イエス様によって命じられて、神様に聖別してもらうように祈ったパンとぶどう酒を、神聖である・特別であると受け止めないのであれば、聖餐式をただの「人間の行い」と見てしまうことにつながります。

私たちは、聖餐式が特別であり、神様が聖別したパンとぶどう酒を受け取る以上、そこにキリスト者かどうかの区別を設ける必要があります。しかし、私たちはそれ以外にもいくつもの食卓を囲むことが出来ています。礼拝後のお茶の時間やクリスマスなどの愛餐会、そして何でもない日の食事会、バーベキューやたこ焼き会のような、「だれをも招いている食卓」が私たちの教会にはあります。そこには、何の区別も差別もありません。その場において私たちは、神様の食卓を実現することが出来ていると思います。

今日の個所でパウロが分かち合った食卓にも、差別は何もありませんでした。ただ、同じ船の上で、同じ恐怖と苦しみを乗り越えた、人と人との真摯な交わりがありました。この「船」というものは、聖書の中では度々「教会」を示すモチーフとして用いられます。新しく定められた奥羽教区の方針も、「主と共に沖へ漕ぎ出す」船としての教会の姿が示されています。

私たち教会は、イエス様に導かれて進む大きな船です。一つの教会が一つの船でありながら、一つ一つの教会が合わさった大きな船です。そこに乗る一人一人は、全く違う背景と事情を持つ、全く違う一人一人です。しかし、同じイエス様に導かれて、同じ神様の方向に進むことが出来ているのです。それが、私たちの「教会」というものなのだと思います。

私たちはどうあるべきなのか、それは私たちが接する誰もが「神様が愛している一人一人」であると理解し、互いをそのまま受け入れ合い、どのような人が来ても受け入れる教会であり、そのように教会が開かれていることを誰に対しても伝えていく、そんな教会になることができればいいのだと思います。孤独や偏見によって苦しめられている人も気兼ねすることなく集うことができ、そんな人にも信頼される教会であり、「だれでもここに来ていい」「ここにいていい」教会、それが私たちの教会が目指す姿なのだと思います。

誰もが神様のもとに集い、誰もが居場所となることができる、どんな人とも手と手を取り合って、神様の愛と平和の中で歩むことができる、そんな教会になる希望へと、私たちは祈り続けることが出来ます。その希望を胸に、今週一週間の歩みを、これからの歩みをともに進めていきましょう。

- 33:夜が明けかけた頃、パウロは一同に食事をするように勧めた。「今日で十四日もの間、皆さんは不安のうちに全く何も食べずに、過ごしてきました。だから、どうぞ何か食べてください。生き延びるために必要だからです。あなたがたの頭から髪の毛一本もなくなることはありません。」こう言ってパウロは、一同の前でパンを取って神に感謝を献げてから、それを裂いて食べ始めた。そこで、一同も元気づいて食事をした。船にいた私たちは、全部で二百七十六人であった。十分に食べてから、穀物を海に投げ捨てて船を軽くした。朝になって、どこの陸地であるか分からなかったが、砂浜のある入り江を見つけたので、できることなら、そこへ船を乗り入れようということになった。そこで、錨を切り離して海に捨て、同時に舵の綱を緩め、吹く風に船首の帆を上げて、砂浜に向かって進んだ。ところが、深みに挟まれた浅瀬にぶつかって船を乗り上げてしまい、船首がめり込んで動かなくなり、船尾は激しい波で壊れだした。兵士たちは、囚人たちが泳いで逃げないように、殺そうと計ったが、百人隊長はパウロを助けたいと思ったので、この計画を思いとどまらせた。そして、泳げる者がまず飛び込んで陸に上がり、残りの者は板切れや船にある物につかまって行くように命じた。こうして、全員が無事に上陸した。